



Title	「性」を取り巻く「否定」の語り
Author(s)	関井, 千晶
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 256-273
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103648
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【臨床哲学の書きもの】

「性」を取り巻く「否定」の語り

関井 千晶

はじめに

「性」という語はさまざまな混乱をもたらす語である。ただ一言「性」と言うとき、それが何を示すのかという混乱がある。たとえば、性別、性愛、性欲、性質……。こういった意味を含み得る語である。また、英語の“sexuality”や、フランス語の“sexualité”といった語も混乱を運ぶ。こうした語は、日本語では、性欲望、性、性愛など、その文脈に合わせて訳されてきた。たとえば、Foucaultの『性の歴史』では、“sexualité”は主に「性的欲望」という訳語を与えられ、「それでは意味が狭くなると思われたり、いささか不十分であると考えられる箇所」では、「性現象」「性行動」などの語が割り当てられている¹。

そのような混乱を孕む性について語るとき、わたしたちは何について語っているのか。本稿では、性を取りまく語りについて取り上げる。中でも、「否定」という視点から考えていきたい。あるものを「否定」ということは、そこに「否定」されている何ものかが存在するはずだからである。性とはどのようなものであるか。「否定」の語りから、そこで否定されている性について考えることは、性について知るひとつの方法となるだろう。

近年、「アセクシュアル (Asexual)」という言葉が少しずつ聞かれるようになってきた。「アセクシュアル」という語は、“sexual”という語に否定の接頭辞“a”を付けたものである。もともとは生物学の分野で無性生殖を意味するのに使われていたが、「性的惹かれを経験しない人」²や、「他者に性的に惹かれられないこと」³、「性交渉、性的実践、人間関係における性交渉の役割について興味が無かったり、嫌悪を抱いたりする全ての個人のための包括的な用語 (umbrella term)」⁴などという意味で使われている。

「アセクシュアルである」とは、何について語っているのか。なぜ「否定」のかたちを取って語らねばならないのか。

比較的新しい概念である「アセクシュアル」を通じて、性について語ることを考えていくことが本稿の目的である。

1. 性、否定、語り

1.1. 性を取りまく「否定」—「アセクシュアル」

「否定の語り」について考える前に、まずは「アセクシュアル」がどのような疑念であるか確認しておきたい⁵。今日「アセクシュアル」と呼ばれうるような存在は、たとえば、Kinseyらインディアナ大学性問題研究所員が行った研究のなかにも見られる。この研究のなかでは、各個人の経験の同性愛的な面と異性愛的な面が、7段階で表さ

れる（図1）⁶。そのなかに、Kinseyらは、Xというカテゴリーを設定した。このカテゴリーは、「異性愛的な刺戟にも、同性愛的な刺戟にもエロティックに反応せず、また少しでも反応した形跡のある外面に見える肉体的な接触を女性とも男性とも行ったことのない者」⁸を表す。「こういう人々をさらに解析してみるとこれらの人々が時には社会・性的な刺戟に事実反応することもあることがわかるが、これはあり得ないことではない。しかし普通の方法で見きわめることができる限りでは、彼らは無反応であり、無経験なのである」という。

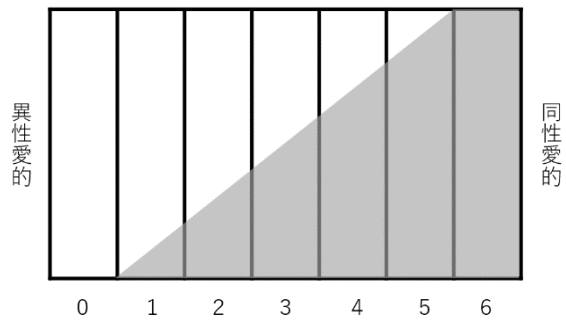


図1 異性愛的, 同性愛的比率の度合い

Kinseyらの研究では、「アセクシュアル」という語は用いられていなかったが、「アセクシュアル」という語は、1972年9月に行われたニューヨーク・ラディカル・フェミニスト共同会議における性的指向に基づいた分科会ですでに見られる。分科会では、それぞれのメンバーのセクシュアリティにかんする個人的・政治的な姿勢について探求したり、それらの見方をより大きなグループで意見交換したりすることを目的としていた。おそらくその会議では、ヘテロセクシュアル、レズビアン、バイセクシュアルの分科会がはじめは設けられていた。しかし、会議の参加者であった、Barbie H. GetzとLisa Orlandoはそれらのどの分科会も、自分たちにとって居心地の良いものではないと感じ、自分たちの分科会、アセクシュアルのための分科会を作った。その会で生み出された文書は改訂され、「アセクシュアル宣言 (Asexual Manifesto)」として作成された⁹。

また、Michael D. Stormsによる性的指向理論には、「アセクシュアル」が組み込まれている¹⁰。Stormsは、Kinseyがひとびとの性的幻想 (erotic fantasy) を分類し、異性愛と同性愛を両極にもつ一次元的なスケールとして捉えたことに対して、性的幻想のスケールは二次元的なものとして捉えられると述べる。そのスケールは、同性愛と異性愛を両極に置くのではなく、同性愛的欲望と異性愛的欲望の程度によってひとびとの性的指向を分類することができるというものである。Stormsの二次元的なモデルに従うと、アセクシュアル、ヘテロセクシュアル、ホモセクシュアル、バイセクシュアルの4つの性的指向に分けることができる（図2）¹¹。これによって、Kinseyらのスケールでは表せなかった、「アセクシュアル」が性科学のなかにも生み出された。

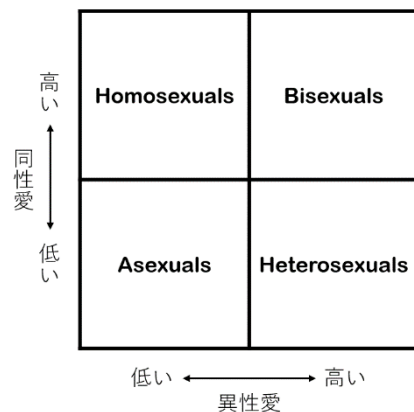


図2 Stormsの二次元的モデル

2000年代に入ると、インターネットの発達に伴い、「アセクシュアル」という語が広まり、ひとびとは互いを発見し始める。Angela Chenは、2000年代初期にインターネットの掲示板やフォーラムな

どで交わされた当時の若者による議論によって、「アセクシュアル」の定義が作られ、「ノンセクシュアル」などの他の選択肢に対しての「アセクシュアル」という語の優位も出てきたのであり、これらの知識の多くはインフォーマルな手段を通じて作りだされたと述べる¹²。また、松浦によると「アセクシュアル」のコミュニティができたきっかけは、「アセクシャル」を自認する人物が1997年に“My Life as an amoeba”という文章をウェブ上に登校したことだと言われており、そのウェブページに対するコメントをきっかけとして、アセクシュアルの人々同士が交流する場ができていったという¹³。その他、2002年にDavid Jayという大学生によって立ち上げられたThe Asexual Visibility and Education Network (AVEN) のインターネット・フォーラムは現在もインターネット上のアセクシュアル・コミュニティとして知られている¹⁴。

ここで注意が必要なのは「アセクシュアル」という概念は、たんに「(性的惹かれや恋愛的惹かれが) ない／ある」という二者択一のものではない。なぜなら、「アセクシャル」を「他者に性的に全く惹かれられない」という定義をしてしまうと、その間にある多様性が失われてしまうからだ。実際、日本で2022年に行われた調査においても、性行動や恋愛的惹かれ、パートナーなどについてさまざまな様相が見られる¹⁵。ほとんど性的惹かれを感じることはないが、まったくないわけではないことは「アセクシャル」と区別して「グレイセクシュアル」と呼ばれている¹⁶。すべてのひとは、「(性的惹かれが) ない／ある」を両極にもつ、性的惹かれの度合いを示す一直線のスペクトラム上に自らの位置をもつと考え、そのスペクトラムの中間部分をグレイエリアと捉えているのである。その中にもさまざまな様相があり、たとえば相手との親しさに応じて性的惹かれを感じることは「デミセクシュアル(demisexual)」¹⁷として分類されている。こうした「アセクシュアル」以外の「グレイセクシュアル」や「デミセクシュアル」といったあり方をも包括する用語として「アセクシュアル・スペクトラム」が用いられることもある¹⁸。

1.2. 「否定」から語る「アセクシュアル」

それでは、「アセクシュアルである」とは、実際どのようなことなのだろうか。「アセクシュアルである」という語りを少し紹介したい。

Julie S. Deckerは、10代の頃のボーイフレンドとの関係のなかで、相手に対する興味の持ち方に違いがあることに気付く。Deckerは、初めてのボーイフレンドと「彼に惹かれていた」わけではないが、「そうすることが期待されていた」ためキスをしたものの、「あり得ないほど最悪な体験」だと感じる。二人目のボーイフレンドとは、「彼が私に求めていたような興味が彼に対して持つことができなかった」ために、相手を「イラつかせて、別れ」る。「お嬢様らしく処女を保とうというのでも、セックスが怖いとか、性病や妊娠を恐れて」いるという「よくある理由」からではないとそれを否定し、「ただ単に、セックスとそれにまつわるものに対する興味がなかった」のだと振り返る。続けて、「セックスが気持ち悪いとか、不道德だとか言う」のではないと否定する。そして再び、「ただ単に、人に性的な魅力を感じたことがないだけ」なのだと言い、「ボーイフレンドにも、学校で一番セクシーと言われる子にも、胸をときめかせるような映

画スターにも、「性的な魅力を」感じない」と述べる。¹⁹

以上は、Deckerが自分のことを「ノンセクシュアル（無性）」²⁰と呼ぶまでの経験である。ここで注目したいのは、Deckerが、「人に性的な魅力を感じたことがない」と注意深く否定を重ねながら、自らの経験を語っているその方法である。

1.3. 性についての語り

なぜ、否定を重ねながらも語らねばならないのか。その手掛かりとして、Foucaultの理論を参考にしたい。

まずは、Foucaultのいう「告白」という概念から確認する。この「告白」という概念は、「愛の告白」といったときに使うようなものだけではなく、もっと広く、「語る主体と語られる文の主語とが合致する言説の儀式」²¹すべてを指す。そのため、「わたしはアセクシュアルである」なども、Foucaultのいう「告白」のひとつのかたちである。

「告白」は、「真理の産出が期待されている主要な儀式の一つ」²²に組み入れられていると、Foucaultは述べる。そして、その「真理の産出には、ことごとく権力の関係が貫いている」²³のだという。なぜなら、人は、顕在的にであれ、潜在的にであれ、そこに相手がいなければ「告白」できないからだ。その相手は、たんに問いかけ、聞き取るだけではなく、「告白」を要請し、語られたことを判断することで介入してくる。ある人が「告白」するときには、その人はすでに権力関係のなかに投げ込まれている。「告白」のこのような側面によって、人間は《assujettissement》〔服従＝主体・化〕させられる²⁴。自分の真実にかんする何かを語れという繰り返される強い要請に服従することで、語る主体として産出させられてしまうのだ。

また、「性は告白の特権的な題材」²⁵であったとFoucaultは述べる。性は単に隠すべきものなのではなく、告白せねばならぬということの裏返しとして、隠されているのではないか、というのがFoucaultの主張である。性が秘密とされているからこそ、人は性について語らなければならない。

そして性と真理は告白において結び付けられる。もともと性の告白はキリスト教会の中で宗教的儀式として行われてきたものだったが、子どもと親など、教会以外のあらゆる関係のなかでなされるようになる。すると、そこではどのような行為がなされたかだけでなく、どのような思考、欲望、快楽などに基づくのか、どのような欲望、快楽がそれを取り巻いているのかまでが問題になってくる。個人の快楽の打ち明け話がさまざまな領域まで入り込めるようになった。それは、科学的領域でも成立するようになる。科学は告白を検証と結び付け、臨床医学的なもののなかに編成する。また、性を〈原因となる力〉を持っているものとするすることで、すべてに適応可能なものとして位置付ける。そして性は本質的によくわからないものであり、語る主体にも隠されているものだとすることで、問う側との共同作業である告白によって性の真実＝真理を明らかにしなければならないとする。その真理は語るものの前に現れてはいるが不完全なものなので、受け取るものが解釈することで真理として完成する。告白された性現象を解釈の対象とすることで、告白は科学的言説を形成するための手段となる。そして、告白は医学的な場面でなされるときには治療のためのものとして機能すると

され、医学的管理体制の下に位置付けられる。このように告白は科学的形態の中に成立した。それは〈性の科学〉と言えるものを形成している。この〈性の科学〉において、「性的欲望」というものが生まれる。それは性の真実であり、病理学的な対象になり得るものである。

このように「性的欲望」は〈性の科学〉と結びついた、「告白」の要求に応えるかたちで生み出される。そしてこの「告白」を生み出すものをFoucaultは「性的欲望の装置」と呼ぶ。

2. 「アセクシュアルである」を生み出すもの

第1章では、「性をとりまく『否定』」として「アセクシュアル」について確認し、「性をとりまく語り」についてFoucaultの「性的欲望の装置」を紹介した。本章では「性をとりまく『否定』の語り」として、「アセクシュアル」と「性的欲望の装置」の接続を試みる。

「アセクシュアルである」という語りは、「性的欲望の装置」のなかでどのように位置づけ得るのだろうか。結論を先に述べておくと、Foucault自身は「アセクシュアル」という語を用いることはないが、「アセクシュアルである」という語りは「告白」の要請に応じるかたちで生み出され得るものであり、むしろ、非常に強い要請のために生み出されたものであると考える。

一方で、「アセクシュアル」研究のなかで「性的欲望の装置」と重なる「強制的性愛」などの新たな概念が生み出されてきている²⁶。そうした「アセクシュアル」研究のなかで立ち上がってきた概念も含めて、「アセクシュアル」と「語り」について考えていく。

2.1. 「アセクシュアル」と「性的欲望の装置」

では、「アセクシュアルである」という語りは「性的欲望の装置」のなかでどのように生み出されるのか。

「アセクシュアルである」という語りを説明する際に、「性的欲望の装置」が有効だと考えられるのは、「アセクシュアル」は何か特定の行動を指すのではないという点にある。「アセクシュアル」は、性的行動の有無などによって決定されるのではない。「性的惹かれを経験しない」や、「他者に性的に惹かれない」、「性交渉、性的実践、人間関係における性交渉の役割について興味が無かったり、嫌悪を抱いたりする」というように、性をとりまくそのひとのありようが問われるのだ。

Foucaultは「性行為において」という言葉を用いているため、性行為を行わない「アセクシュアル」を捉え損ねているようにも見えるかもしれないが、それは誤りである。「性的欲望の装置」は婚姻関係のなかで、「冷感症の女」、「性的不能者にしてサディックであり、かつ倒錯者である夫」のような存在も描き出すからである²⁷。

また、Foucaultが「権力」を「抑圧」や「禁止」の法制機能のみをもつものとしてではなく、「告白」を要請する産出機能をもったものとして描き出そうとしていることも重要な点である。性が「抑圧」されているという捉え方の中では、「アセクシュアル」を描出することはできない。そうではなく、性を〈原因となる力〉とみなし「真理」

を語れという要請に応じることで「アセクシュアル」が生み出されるのである。権力は禁止や抑圧という作用だけではなく、同時に「煽動でもあり強化でもある作用を伴ってなされることも可能」²⁸であり、つまり『権力の多形的な技術』²⁹として採用している。そのような技術を用いて、権力は「アセクシュアル」といったような「欲望の稀な形態あるいはほとんど知覚されないほどの形態」³⁰までも捉えるのだ。

2.2. 「アセクシュアル」と「強制的性愛」

次に、「性的欲望の装置」の発展として捉えられている「強制的性愛 (compulsory sexuality)」という概念について取り上げる。

「強制的性愛」という概念は、「アセクシュアル的ではない世界にはアセクシュアル／エース³¹の人々のための場所は全く存在せず、そのためまるでそのような人が一人も存在しないかの様に世界がふるまっている」³²様子や、「性的なことは普遍的な規範であり、すべてのひとが性的で、性行為を望んでいるにちががなく、性的でないことや性行為を望んでいないことは生得的に良くないことであり、治療の必要があるという予想」³³などと定義されている。

以上のような説明が与えられている「強制的性愛」であるが、「アセクシュアル」にはたらく権力構造は「性的欲望の装置」によって説明し得るものである。実際、「性的欲望の装置」と「強制的性愛」の重なりを指摘している一方で、「強制的性愛」という新たな概念を用いる理由が述べられないことがある³⁴。そのため、「強制的性愛」と「性的欲望の装置」との重なりを捉えながら、一方で「性的欲望の装置」とは異なる道を進んでいくことでどのような戦略を取ろうとしているのかを考えたい。

Guptaは、「強制的性愛」を次の二つのことを描くものだと説明する。ひとつは、「すべてのひとは性的である」という前提である。もうひとつは、性的欲望や性的行動の欠如といった、さまざまな形態のノンセクシュアリティを主流から追いやり、対象を欲望する存在として自らを経験すること、性的アイデンティティを採用すること、性的行為に参入するように強いる社会規範と慣習である。

詳しい検討をする前に、Foucaultの理論との違いを指摘しておきたい。「すべてのひとは性的である」と「ノンセクシュアリティを主流から追いや」という点について、「性的である」や「ノンセクシュアリティ」というものの存在がすでに前提とされているのではないかと問うことができるだろう。Foucaultにおいて、「性的欲望」というものは、「己が真実を産出しなければならぬ言説の機能上の要請に照応している」³⁵ものである。それは、なにか特定の行動群を表すものでも、なにかしらの基準により「恋愛的」「性的」などと分解することができるものでもない。問う側との共同作業である「告白」のなかで真理としてあらわれてくるものである。

Foucaultは、性をめぐってどのようにして権力がわたしたちを捉えるのかについて分析したが、Guptaは、「性的欲望や性的行動の欠如といった、さまざまな形態のノンセクシュアリティを主流から追いやり、対象を欲望する存在として自らを経験すること、性的アイデンティティを採用すること、性的行為に参入するように強いる社会規範と慣習」を描くものとして「強制的性愛」を位置付けるのみで、それがどのように

わたしたちを支配するののかについては語らない。

このような違いから、「強制的性愛」は「性的欲望の装置」とは異なる次元で性愛を捉えたものだと言えそうである。しかし、ここで「強制的性愛」という概念を退けるのではなく、Guptaがこの概念を用いて何を行おうとしていたのか考えてみたい。

Guptaは「強制的性愛」を分析の道具として位置付けるが、それを用いる有効性として以下の三つの点を挙げる。

一点目は、既存の研究をつなぎ、どのように性的なことが強制されているかという新しい研究への着想を得られることである。これまでも、フェミニズムや能力主義、人種差別などの問題を扱う分野で、性にかんする研究はなされていたがそれらの共通の前提として「強制的性愛」があるのだという。

二点目は、特定の集団に対する「脱性化 (desexualization)」が社会的支配としてどのように用いられるかを分析できることである。社会的に特権をもっている集団は、性を謳歌することができる一方で、「過少性欲 (hyposexual)」や「過剰性欲 (hypersexual)」を示すひとびとは病理化される。また、社会的に周縁化されている集団に属するひとびとは、過少性欲か無性 (nonsexual) だとみなされる。それが「脱性化」であるという。身体障害のあるひと、自閉症のひと、高齢のひとなどが例に挙げられている。こうした集団に属するひとが、「再-性化 (resexualization)」することで「人間カテゴリー」に近づこうとする戦略を取ることもあるという。Guptaは、これらのことが示すのは、私たちの社会が人間と正常性を性的なことと結び付けて定義していることであると述べる。しかし、それは必ずしも異性愛ではないのだという。

三点目は、性の解放を女性のエンパワーメントや、抑圧的な規範を弱めるのに必要なものとして位置付けるのを避けられることだ。強制的性愛の概念は、セックスと解放とを、非規範的な性的実践と抑圧的な社会規範の弱体化とを安易に同一視することを避けるように促すのだという。

このような有効性をもったものとして、この概念は適当なものだろうか。もう少し理解を深めるために、次節では、「強制的性愛」が土台としている「強制的異性愛」について見ていく。

2.3. 「強制的異性愛」と「強制的性愛」

「強制的性愛」という語は、Adrienne Richの「強制的異性愛 (compulsory heterosexuality)」という語にならったものであるとされている³⁶。Richのいう「強制的異性愛」とは、「結婚と男への性的志向〔orientation〕は、たとえ不満足もしくは抑圧的であるにしても必然なのだ」と女に信じさせてきた強制力であり、「貞操帯、幼児結婚、芸術・文学・映画におけるレズビアン存在の消去 (エキゾチックなものや倒錯的なものだけは除いて)、異性愛ロマンスと結婚の美化」などが、その強制的形式として挙げられている³⁷。

先ほどの引用のなかでRichが用いている「レズビアン存在 (lesbian existence)」という語は、「レズビアンたちの歴史的存在という事実と、そういう存在の意味を私たちがたえずつくりつづけていくその創造との両方」³⁸を指すものである。Richは、この語

をレズビアニズムという語の「臨床的で限定的なひびき」³⁹から逃れるために、「レズビアン連続体 (lesbian continuum)」という語とともに作りだした。「レズビアン連続体」というのは、「女への自己同定の経験の大きなひろがり——一人一人の女の生活をつうじ、歴史全体をつらぬくひろがりをつくみこむ意味」をもち、「たんに女性が他の女性との生殖器的経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいだくという事実だけ」を指すものではない⁴⁰。しかしまた、女の友情だけを表すものでもなく、「女性の経験として同定される経験のありうるかぎりのヴァリエーションを、最大限に許容できる語が欲しいという願い」⁴¹から出てきたものでもある。強制的異性愛がつねにその上を横断することで、「女同士の友情や結びつき」が「エロティックなものから切り離され、そうすることでエロティックなものそれ自体」が「レズビアニズム」という「臨床的」なものなかだけに限定されてきたこと⁴²への異議申し立てだと考えられる。

Richは「レズビアン存在」についてそのセクシュアリティのありようを明言することはせず、あくまでも「一次的なエロスと情動の相手に女性を選択した女たちの足跡と知識への敬意」⁴³が込められた語としてその言葉を用いる。このように「レズビアン」を定義せず、歴史的状況によってつくられてきたとみるRichの姿勢は、Foucaultにも通じるものだろう。

Guptaは「強制的異性愛」においてみられる異性愛の強制は、「強制的性愛」が存在していることの根拠なのだと述べる。だが、「強制的異性愛」の概念で重要なのは、男の女への性的行為の強制なのではなくて、それをひとつの方法として、女を異性愛へと導く「肉体への残虐さから意識の統制にまでおよぶ強制力」⁴⁴なのである。Guptaは、性的行為の強制が女への強制だけではないことを理由に、「強制的異性愛」ではなく「強制的性愛」なのだと述べる。しかし、異性愛の強制は意識の次元にまで及ぶので、女同士の経験というものが、男の代わりに女を選んだ女として異性愛化されてしまうことも「強制的異性愛」の表れのひとつなのだ。思うに、Guptaは性的行為の強制という次元にのみとどまっている。

2.4. 「強制的性愛」の検討

FoucaultとRichの概念との比較を経て、その二つのモデルの応用としては位置づけ得ないのではないかということ述べた。では、それらの概念とは別のものとして「強制的性愛」という概念はどのようにして分析の道具として役立ち得るだろうか。

ここでは次の二つの問いを立てて検討する。ひとつは、Foucaultとの比較でも少し触れたが、「性的」「ノンセクシュアリティ」などがすでに存在するものとして想定されているように見えるが、どのようなものとして描かれているのかという問いである。

もうひとつは、「強制的性愛」概念は「アセクシュアル」以外の観点から見ても十分に機能するものであるかという問いである。Guptaの願い通り、さまざまな既存の研究をつなぐものとして、有効な分析のための道具になっているのか。もしないのなら、異なる分野をつなぐような道具になるように、組み替えることは可能だろうか。

2.4.1. 「強制的性愛」における「性」

「強制的性愛」では「性」はどのようなものとして語られているのだろうか。

Guptaは「強制的性愛」が存在する証拠として四点挙げている。一点目は、先述したように、「強制的異性愛」のもとで、女性が異性愛行為に参入するよう強制されていることである。そして、望まない性行為に向かわされているのは女性だけではないとして、「強制的性愛」の存在を強調する。二点目は、セクシュアル・マイノリティ・コミュニティも性行為に参入するように圧力をかけられていることである。この例を挙げて、「異性愛」以外の場面でも現れるものとして「強制的性愛」の存在を強調する。この二つの点では、性というものが主に性行為にかかわるものとして捉えられている。

三点目は、性科学と性医学の批判的分析のなかで、19世紀には、性的欲望が人間存在にとってポジティブで自然なものとして扱われてきたことや、20世紀初頭において、結婚の維持における性的満足的重要性が中産階級に共有されていたこと、さまざまな形態のノンセクシュアリティや過剰性欲、性的「倒錯」が頻繁に病理化されてきたこと、1970年代に、過少性欲が性機能障害のなかに位置付けられるようになること、1980年代のノンセクシュアリティへの薬を用いた治療などの出来事を列挙する。

20世紀初頭の性科学や性医学において、たとえば、Krafft-Ebingの『変態性欲心理』では、性は異性愛に限定されており、同性愛は先天性のものとは後天性のものに分けられ、「予防」すべきものとされる。先天的な同性愛は「かかる不幸なるものを作らざるように」すべきとされ、後天的なものは「色情の不幸なる転倒に至るべき有害物を避くこと」が重要であるとされている⁴⁵。

四点目は、資本主義・営利主義的なメディアのなかで性が商品として使用されてきたことである。これは、主に身体の使用など、性的な表象の問題にかかわっており、その他の点における性とはまた別のものである。

このように、Guptaは文脈によって異なるものが想定されている性をまとめ上げ、「強制的性愛」というものを作り上げている。一方で、Gupta自身は自分の論の場面に応じて、性のひとつの側面のみを切り取っているのではないか。

2.4.2. 「アセクシュアル」以外の領域における「強制的性愛」

前項で述べたように、「強制的性愛」が想定する性は文脈から切り離されたものである。だが、性をその都度どのようなものであるか措定するだけでよいのだろうか。そこで、「アセクシュアル」以外の領域においても、「強制的性愛」という概念が機能するのかという点について考えたい。

ここでは、「強制的性愛」の側面のひとつである「性的欲望や性的行動の欠如といった、さまざまな形態のノンセクシュアリティを主流から追いやり、対象を欲望する存在として自らを経験すること、性的アイデンティティを採用すること、性的行為に参入するように強いる社会規範と慣習」を記述するという側面に注目する。今までにここで用いられている「ノンセクシュアリティ」がすでに前提とされたものであり、いかにしてそれが産出されるのかが描けないということは述べた。だが、「ノンセクシュアリティ」の産出については別の道具、たとえば「性的欲望の装置」で捉えることにして、

その周縁化の分析を「強制的性愛」に担わせることはできるだろうか。

「ノンセクシュアリティ」が周縁化されているというのは、「アセクシュアル」の視点から見ると正しいように思われる。しかし、その他の性的欲望や性的行動が欠如しているはずだと思われているひとの視点から見るとどうだろうか。

先述したように、Guptaは「強制的性愛」の有効性のひとつとして、特定の集団への「脱性化」がどのようにして社会的支配の方法として用いられているかに注目することができる。〈人間〉と〈正常〉の定義は性と結びついており、〈正常〉だと考えられているひとは、性的であれという強い圧力に直面するし、〈正常〉に接近したいと考えるひとは性的主体として自らを作り上げねばならないのだという。こうした自らを「再-性化」する戦略をとる者として、アメリカの第二派フェミニストたち、レズビアンたち、障害者運動の活動家や研究者たちが挙げられている。多くの場合、「再-性化」の戦略は、セクシュアリティを普遍的な特徴だと主張することや、ノンセクシュアリティを意識的に、もしくは無意識のうちに遠ざけることによってなされるが、「強制的性愛」を認識することで、こうしたセクシュアリティの普遍化、ノンセクシュアリティのスティグマ化による「脱性化」への抵抗を避けることが促されるという。

これに対して、問いかけたいことがいくつかある。まず、「脱性化」に対する戦略としての「再-性化」の批判についてである。Guptaは「強制的異性愛」における異性愛女性とレズビアン、障害のあるひとのセクシュアリティの不可視化が実際にどのように行われてきたのかについては詳しく説明せず、そのような戦略は「脱性化」への応答として理解可能かつ有益なものであると認めながらも、その戦略のなかで性が〈正常〉や普遍的なもの結びつき、ノンセクシュアリティがスティグマ化される可能性を問題視する。

Guptaが述べるように「脱性化」への抵抗と「アセクシュアリティ」の間には、緊張関係があるように見える。そのことは、他の論者からも指摘されている。ここからは、この点について、「脱性化」とそれに対する「再-性化」戦略の行われ方を取り上げながら、Guptaの主張を検討する。

GuptaやRichが論じているのはアメリカの事例であるが、日本においても「脱性化」に対する「再-性化」の戦略と、それに対する「アセクシュアル」の分野からの批判は見られるため、今回はそれを取り上げる。

安積は障害のあるひとが恋愛や結婚、性について語ると、世間から「人さまの世話になりながら」「まったくいやらしい」⁴⁷という否定的なまなざしを向けられると述べる。そしてそのようなまなざしのなかで、障害をもつ人はみずからの性について考えることができなくなっているのだという⁴⁸。そのように「女としての性を否定させられる」なかで、安積は「なんとかそこから脱したいともがいてみつけた答えが、(中略)自分のからだ肯定されること、つまり、たとえ私にとってはレイプでしかない関係によってでも、自分が男性の性的な対象になりうると確認することであり、それができさえすれば、女であることを取りもどせるのではないかと考えていた」⁴⁹と、男性との性的行為に自らを投げ込む。

けれども、安積のこのような経験のなかに〈正常〉と性の結びつきを見出し、その

結びつきを強化しうるものとしてその経験を捉える前に、なぜこの戦略を選択することになるのか、という点に目を向けたい。安積は、当時のことを「思い出すのもいやな、性的な交渉だけで終わった男たちとの悲しい関係」⁵⁰と呼ぶ。そして、「相手の男にしてみれば、要求されてやったんだと思っているだろうし、こっちも自分からはっきり誘ったわけじゃないとはいえ、拒否はしなかった」ため「一般にはレイプとみなされないだろう」と前置きをして、「それでも、私にとっては、あれはたしかにレイプだった」と言う⁵¹。

この安積の痛切な言葉に対して、「脱性化」への応答としての理解や有効性を認めるだけでよいのだろうか。「こうしたセクシュアリティの普遍化、ノンセクシュアリティのスティグマ化による『脱性化』への抵抗を避ける」ように求めるのは、「再・性化」の戦略を取るひとに対してだけでよいのだろうか。なぜなら、「私は拒否ができないぐらいに追いつめられていた、ああいう状況に自分で自分を追いつめていった、そうさせた社会のありよう自体がレイプ」⁵²だと、安積に語らせる社会のありようがまず存在していると思われるからだ。安積は「私たちの問題というのは、障害のない人たちの社会の問題の裏返しとしてある。障害をもつ女性にとって、足が十分に開かないことが結婚できない理由、男の人を愛せない理由になっているということは、裏返せば、障害の無い女性は、足が十分に開くことが最大のセールス・ポイントだということだ。障害の無い女と男が精神的に対等な関係をつくることができているならば、こんなことにはならないはずだ」⁵³と述べる。

他にも、障害のあるひとに対する「脱性化」は、強制不妊手術など身体に干渉するかたちでも行われてきた。そのような方法を取って身体が支配されることに対して、その権利を取りもどそうとすることは、「再・性化」の戦略というよりも、非障害者の女性がやることをやること⁵⁴を目指したものだとも言える。

このように、周縁化を描くためには、周縁化されている状況だけを分析するのではなく、それがどのようになされているのか、どのような構造がそこにあるのかをこそ見るべきなのだろう。そして、当事者の抵抗戦略それ自体のみを問題にするのではなく、それを生み出す社会、そしてその社会を構成する自分自身にも目を向けることが必要なのではないか。そのような方法が、領域を超えて性について、その問題について語る方法なのだと考える。

3. 「否定」によって語る

第2章では、「アセクシュアル」を生み出すものは「性的欲望の装置」を用いて分析することができ、「強制的性愛」という概念では、捉えきれない部分があることが分かった。

第3章では、「強制的性愛」では捉えきれない部分について、どのような可能性がひらかれているのかについて、検討していく。

3.1. 「強制的性愛」の限界

Gupta自身は、「強制的性愛」の限界として、以下の二点を挙げる。

一点目は、本質主義者の考えを擁護しかねない点である。「強制的性愛」をすべてに関わる規則のシステムとして描くことは、「アセクシュアリティ」を社会規範から独立した本質的もしくは生得的な特徴として見ること、「アセクシャル」の人々を現在の規範に抑圧された人として見てしまうこと、「アセクシュアリティ」を抑圧から解放するさまざまな形態を探し求めることを促進するのだという。

Guptaが「強制的性愛」の限界として二点目に挙げるのは、異種混淆で時には矛盾すらしている現代の性規範の本質を分かりにくくするという点である。つまり、求めているのに「脱・性化」される集団がいること、いくつかの性やセクシュアリティの形はほとんどの社会から非難されていること、性やセクシュアリティを非難する人々もいるということ、社会のなかの特定の領域（職場など）は「性的欲望が少ない」とされてきたということである。

それを避けるためには、「強制的性愛」を独立したシステムとして捉えるのではなく、どのように社会が特定のセクシュアリティや関係性の型を承認し、この型に適合しないひとを周縁化するのかを幅広く分析するものとして捉えるべきなのだという。

以上がGupta自身の述べる「強制的性愛」の限界であったが、ここでは述べられていない点について、一つの問いを投げかけたい。

Butlerは、覇権的な構造に対して、そこで周縁化され、未発達とされ、下位におかれているものの方に価値を置くことでその構造を反転させようとする戦略について、「解体しようとしている規範化モデルと、どの程度までかかわっているのか」⁵⁵と問う。

同じ問いは、「アセクシャル」の実践にも投げかけられるだろう。「すべてのひとは性的である」という「異性愛」、「同性愛」などとするしづけられるまえの普遍的な「性愛」というものを想定し、そこにおいてのみ存在しうる「非・性愛 (a-sexual)」の位置に価値を与えようとするのは、「性的である」ことを重要なものとする規範化モデルを「無批判に模倣する裏返し」⁵⁶になってしまう恐れがある。そのような方法で、「性的でない」関係や生き方の価値を語ることが、「アセクシャル的でない世界」に対する異議申し立てとして、どの程度有効に作用するだろうか。

Butlerは問う。「こういった二元的な関係は、どこまで無限に繰り返されていくのか」⁵⁷。そして「対立的な二分法そのものを破壊するための、どんな可能性が存在しているのか」⁵⁸と。

「セクシュアル／アセクシャル」という二分法において、「アセクシャルである」と語ることについて問うのは、「すべてのひとは性的である」という前提を採用した際に、「アセクシャル」が陥るパラドックスがあるからだ。Guptaが指摘するところによると、「『アセクシャル』だと自認する人が、アセクシャルの可視性の取り組みに携わることは、性的欲望は普遍的なものだという、当たり前のもので受け入れられた前提を覆すことによって性規範を崩壊させる一方で、セクシュアリティをひとびとの言説の中心に位置づけ続けることによってセクシュアリティ化を強化するという喜ばしくないパラドックスに絡めとられる」⁵⁹のだという。

ここでGuptaの言う「性的欲望は普遍的なものだという、当たり前のもので受け入れられた前提」とは、「すべてのひとは性的である」という前提と言い換えられる。

そして、パラドックスのもうひとつの側面である「セクシュアリティをひとびとの言説の中心に位置づけ続けることによってセクシュアリティ化を強化」するという点も「アセクシュアル」を性的指向、アイデンティティとして採用するような考え方では避けられないものである。

Guptaによると研究者たちも、現代の「アセクシュアル・アイデンティティ」について詳しく述べることは、「強制的性愛」の疑問視であるのか、もしくは、単なる「(ア)セクシュアリティ」を個人の本質的な特徴として具体化しているだけにすぎないのかという議論を始めているのだという。

しかしながら、このパラドックスや研究者たちの議論は、「セクシュアル／アセクシュアル」の二分法に基づき、「アセクシュアルである」と語ることによって、「強制的性愛」を疑問視していると捉えるからこそ生じるものではないだろうか。そのような二分法では、「アセクシュアル」は「セクシュアル」との間に境界を引き、「アセクシュアル」として語る必要が出てきてしまう。

すると、先に引用したDeckerの語りのように、慎重に否定を重ね、自分の経験がいかに「セクシュアル」と異なるのかということの説明せねばならなくなる。だが、そのように「セクシュアル／アセクシュアル」を相互排他的で不連続なものとして捉えてしまうと、「セクシュアル」の意味づけ直しの道が閉ざされてしまうのではないだろうか。なぜなら、「アセクシュアルである」と語るためには、否定されている「セクシュアル」の存在が不可欠であり、「アセクシュアル」の側からは「否定」を重ねることで、自らを「セクシュアル」から独立させることしかできないからだ。このことは不連続なモデルとして、アセクシュアル・スペクトラムのような、グレーゾーンをもった連続体について論じることでは、この問題を解決することはできないだろう。なぜなら、スペクトラムの両極は、完全に「セクシュアル」と完全に「アセクシュアル」であるからだ。

そうではなく、「性 (sexuality)」自体の意味を問い直すことはできないだろうか。

3.2. 「性 (sexuality)」再考

次の例から、「性」の意味づけ直しの可能性を探っていきたい。

Chenは、イギリスのテレビ番組を用いて、ひとの裸が「セクシュアル」ではなくなる例を紹介する。その番組は、主役の出演者が、自らのデート相手を見つけるというものだ。「主役の出演者が好むジェンダーの裸の人」が舞台上に並び、自らの腰から下を見せ、主役にアピールする。「ぼやかされたり曖昧にされているものは何も」なく、「明らかなのはひたすらペニスとワギナ」である⁶⁰。そのなかから、最終的に誰かひとりを選び出すというのが趣旨の番組であるようだ。Chenは友人たちとその番組を視聴したとき、「想像の限り最もエロティックでないテレビの一例」⁶¹であるということで意見が一致する。そして、読者に「ぜひこのショーを見て、それがいかにセクシーでないかに驚いてほしい。性器を観察してほしい。」⁶²と誘いかける。そこには、「人格をそぎ落とされ、性的でないままに、毛の混じった皮膚のしわがあるだけ」で、「性的興奮を引き起こすものは何もない」ため、「意味のあることは何もない」のだと言う⁶³。

そしてそこからもう一歩進んで、Chenは次のように述べる。「意味のあることは何もないが、あなた以外の人にはあなたが取り出すことのできない何かを取り出しているのだ」⁶⁴。それはひとつの仮定、もしくは疑似体験である。その番組の身体は「あなた」に対しては何も意味しないが、他のひとにとっては異なる意味を表すもの、たとえば性的な意味を表すものだとしたら。これらの身体は、他の人に対しては何らかの反応を喚起するが、「あなた」にはそれがわからない。このように、「性的である」とされているはずの身体に対峙しても、それが「性的である」と感じられないような例を挙げて、Chenは「アセクシュアル」の感覚を共有しようとする。

この事例を単なる「アセクシュアル」の感覚の疑似体験としてのみ捉えるのではなく、「性」を再考するための事例として捉えることもできるのではないだろうか。

Butlerは規範化モデルの解体の方法を探る問題を、攪乱の可能性が「法のまえに咲き誇っているのか、それとも法が転覆したあとなのか、または法の支配のただなかなのか」という、時をめぐる比喩の論争⁶⁵として描き出す。

Butlerはこの論争において、「法のただなか」という立場をとる。「法の『まえ』や『あと』」というのは、言説によってパフォーマンスに設定される時間の様態であり、「その時間の様態が引き合いに出される」のは、「攪乱や不安定化や置換のため」に、支配権力を免れるものが要する「規範的枠組みのなかだけ」であるからである⁶⁶。

この「法のただなか」という考え方は、ButlerがFoucaultを参考にしたものである。Foucaultにとっては、「禁止はつねに予期せずして何かを生み出すもの」であり、「禁止のなかで一禁止によって一基盤づけられ生産されると考えられている『主体』が、権力の『そと』や『まえ』や『あと』」に「アクセスすることができない」のだ⁶⁷。Foucaultの言葉を用いると、「法が、欲望と欲望を成立させる欠如とを構成して」おり、「権力の関係は、欲望のある所にすでに存在するはず」なのである。そのため、「後から行使される抑圧のなかに権力を告発するのは、幻想にすぎない。しかしまた、権力の外で欲望を探し求めるのも虚妄なのである」⁶⁸。

このような考え方に基づいて、Butlerは「権力は撤回できるものでも、否定できるものでもなく、ただ配備しなおすことができるだけである」⁶⁹述べる。

このように考えたとき、先ほどの事例を「性的である」ことを配備しなおす例として捉えることも可能なのではないだろうか。つまり、「ペニスとワギナ」が「想像の限り最もエロティックでな」くなってしまふことが可能であるということは、「ペニスとワギナ」が「性的である」ことは必然ではないのだ。「アセクシュアル的ではない世界」にも「アセクシュアル」の精神があり、首尾一貫した「性」というものを想定することはできないだろうと考えられる。このように、「セクシュアル／アセクシュアル」の二分法的な不連続性を疑問に付すことで、「自然」「本能」とされてきた「性」について問い直すことができるはずだ。

そして、そのような考え方のなかでは「否定」を重ね、自らを「アセクシュアルである」と語る必要はなくなるだろう。

おわりに

本稿では、性を取りまく「否定」の語り、「アセクシュアル」の語りを通して、性とはどのようなものであるか考えること、そして、なぜ「否定」のかたちを取って語らねばならないのか考えてきた。「すべてのひとは性的である」と言えるような首尾一貫した「性」というものは疑わしく、そうであるならば「否定」のかたちで「セクシュアル／アセクシュアル」という境界線を引くのではなく、「アセクシュアル的でない世界」にも「アセクシュアル」的な精神があり、その逆もあり得るという可能性を考えることができるのではないだろうか。

そのようにして、「性」に疑問が投げかけられた世界では、「性的でない」という首尾一貫した「アセクシュアル」という語りも疑問に付されることになるだろう。「否定」されている「性」が存在しなければ、「アセクシュアル」も存在しなくなってしまうからだ。だが、「アセクシュアル」を第4の性的指向として、Stormsの二次元モデルのように性的惹かれの有無によって振り分けられることに安住したり、メタカテゴリーとしてセクシュアリティの外に自らの真実を探し求めるのではなく、「性」自体を揺らがす方法で「アセクシュアル」を語る道もあるはずだ。

参考文献

- As Loop編 (2023) 「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2022：単純集計結果報告書」
- Butler, Judith (1990) : *GENDER TROUBLE: Feminism and the Subversion of Identity* (=『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、1999)
- Chasin, CJ Deluzio (2014) “Making Sence in and of the Asexual Community: Navigating Relationships and Identities in a Context of Resistance,” *Journal of Community & Applied Social Psychology*, vol. 25, Issue 2, p.167-80.
- Chen, Angela (2020) *ACE: What Asexuality Reveals About Desire, and the Meaning of Sex*, (=『ACE：アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』羽生有希訳、左右社、2023)
- Decker, Julie Sondra (2014) *THE INVISIBLE ORIENTATION: An Introduction to Asexuality*, (=『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて—誰にも性的魅力を感じない私たちについて』、上田勢子訳、明石書店、2019)
- Krafft-Ebing, Richard. V. (1886) *PSYCHOPATHIA SEXUALIS : mit besonderer Berücksichtigung conträren Sexualempfindung*, (=『変態性慾心理』大日本文明協會編、大日本文明協會、1913)
- Foucault, Michel (1976) *LA VOLONTÉ DE SAVOIR Volume 1 de HISTOIRE DE LA SEXUALITÉ*, (=『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986)
- Gupta, Kristina (2015) “Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept,” *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 41 (1): pp.131-54
- Kinsey, C. Alfred et al. (1953) *SEXUAL BEHAVIOR IN THE HUMAN FEMALE*, (=『人

- 間女性における性行動』、朝山新一他訳、コスモポリタン社、1954)
- Orlando, Lisa. (1972) “Asexual Manifesto,” (最終閲覧日：2024年1月5日)
(<https://app.box.com/s/p7ngvv3iueaj0hk7xadkwd92af2zx4yz>)
- Przybylo, Ela. (2016) “Introducing Asexuality, Unthinking Sex,” N. Fischer and S. Seidman eds., *Introducing the New Sexuality Studies*: 3rd edition, London: Routledge, 181-91.
- Rich, Adrienne (1980) “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence.” (= 「強制的異性愛とレズビアン存在」、『アドリエヌ・リッチ女性論：血、パン、詩。』、大島かおり訳、晶文社、1989、pp.53-119)
- Storms, Michael D (1979) “Sexual Orientation and Self-Perception,” P. Pliner et al. (eds.), *Perception of Emotion in Self and Others*, 1979, pp.165-80
- (1980) “Theories of Sexual Orientation,” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 38, No. 5, 1980, pp.783-792
- The Asexual Visibility and Education Network (AVEN) (最終閲覧日：2025年3月3日)
(<https://www.asexuality.org/?q=general.html#def>)
- 安積遊歩 (1993) 『癒しのセクシー・トリッパーわたしは車イスの私が好き！』、太郎次郎社
- 飯野由里子 (2020) 「『省略』に抗う」、『思想』no.1151、pp.52-69
- 松浦優 (2020a) 「メランコリーのジェンダーと強制的性愛 アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察」、『Gender& Sexuality』第15号、pp.115-13
- (2020b) 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティヴィティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」、『西日本社会学会年報』No.18：89-101
- 松浦優 (2021) 「雰囲気としての強制的 (異) 性愛—アセクシュアルを理解可能にするための現象学」、稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学：経験が響きあう場所へ』、ナカニシヤ出版、pp.111-30
- 松浦優 (2025) 『アセクシュアル アロマンティック入門—性的惹かれや恋愛感情を持たない人たち』、集英社

¹ Foucault (1976=1986) p.212、訳者あとがき。

² The Asexual Visibility and Education Network (AVEN)

³ Decker (2014=2019)

⁴ Przybylo (2016)

⁵ 「アセクシュアル」概念については、主にChen (2020=2023) の整理を参考にした。また、本稿は著者が2024年1月に提出した卒業論文を基にしているが、書き直しの際に松浦 (2025) の内容も参照した。

⁶ Kinsey et al. (1953=1954) p.49、第93図。「比率の定義は次のとおりである：0 = 完全に異性愛的、1 = 偶発的な同性愛の経歴はあるが、大部分異性愛的、2 = はっきりした同性愛の経歴はあるが、大部分異性愛的、3 = 等しく異性愛的であり、同性愛的であるもの、4 = はっきりした異性愛の経歴はあるが、大部分同性愛的、5 = 偶発的な異性愛の経歴はあるが、大部分同性愛的、6 = 完全に同性愛的」[Kinsey et

- al. (1953=1954) p.49]
- ⁷ Kinsey et al. (1953=1954) p.52。
- ⁸ Kinsey et al. (1953=1954) p.52。
- ⁹ Orlando (1972)
- ¹⁰ Storms (1979、1980)
- ¹¹ Storms (1980) p.784、図1。
- ¹² Chen (2020=2023) pp.45-8。
- ¹³ 松浦 (2025)
- ¹⁴ Chen (2020=2023) pp.45-8。
- ¹⁵ As Loop (2023)
- ¹⁶ Decker (2014=2019) pp.63-4、松浦 (2020b)
- ¹⁷ Decker (2014=2019) pp.67-70、Chen (2020=2023) pp.62-6。“demi”は「半分」を表す接頭辞である。Deckerは「デミセクシュアル」と「グレイセクシュアル」は同じではないと捉えているが、Chenは「デミセクシュアル」を「グレイセクシュアル」の一部であると捉えている。
- ¹⁸ Decker (2014=2019)
- ¹⁹ Decker (2014=2019) p.9、〔 〕内引用者。
- ²⁰ 1996年に18歳であったDeckerは、その後2001年に設立されたAVENに参加し、「アセクシュアル」の可視化に賛同し、自らを「ノンセクシュアル」という語から「アセクシュアル」という語に結びつけるようになる[Decker (2014=2019) p.9-10]。
- ²¹ Foucault (1976=1986) p.80。
- ²² Foucault (1976=1986) p.76。
- ²³ Foucault (1976=1986) p.77。
- ²⁴ Foucault (1976=1986) p.79。
- ²⁵ Foucault (1976=1986) p.79。
- ²⁶ Gupta (2015)、松浦 (2020b)
- ²⁷ Foucault (1976=1986) p.141。
- ²⁸ Foucault (1976=1986) p.20。
- ²⁹ Foucault (1976=1986) p.20。
- ³⁰ Foucault (1976=1986) p.20。
- ³¹ Chasinは「エース (Ace)」という語を「アセクシュアル・コミュニティには、それ自体を『アセクシュアル』と自認していないメンバーも含まれる」ため、そのようなひとをも包括する語として用いている[Chasin (2014)]。
- ³² Chasin (2014) 脚注は引用者による。
- ³³ Przybyło (2016)
- ³⁴ Gupta (2015)、松浦 (2021)
- ³⁵ Foucault (1976=1986) p.89。
- ³⁶ Gupta (2015)、松浦 (2020a)、Chen (2020=2023) p.81。
- ³⁷ Rich (1980=1989) p.72、〔 〕内引用者。
- ³⁸ Rich (1980=1989) p.87。
- ³⁹ Rich (1980=1989) p.87。
- ⁴⁰ Rich (1980=1989) p.87。
- ⁴¹ Rich (1980=1989) p.117。
- ⁴² Rich (1980=1989) p.89。
- ⁴³ Rich (1980=1989) p.117。
- ⁴⁴ Rich (1980=1989) p.72。
- ⁴⁵ Krafft-Ebing (1886=1913) p.344。
- ⁴⁶ 松浦は、当事者による「再・性化」の戦略は、「脱性化に対する応答としてしばしば有意義であり、また理解できるものである」としながら、「場合によっては、当該集団の内部でアセクシュアルが存在する

余地をなくすことにつながりかねない」と注意を促す [松浦 (2020b) p.92]。Chenは、アセクシュアルを自認する、身体障害をもつカラの語りを紹介する。「やりたくないがゆえに自分が『悪い(バッド)障害者』であるようにも感じる。『ステレオタイプにただ屈してるだけだって感じることは時々ある』とカラは付け加える。」 [Chen (2020=2023) p.215]

⁴⁷ 安積 (1993) p.190。

⁴⁸ 安積 (1993) p.190。

⁴⁹ 安積 (1993) p.154。

⁵⁰ 安積 (1993) p.98。

⁵¹ 安積 (1993) p.98。

⁵² 安積 (1993) p.98。

⁵³ 安積 (1993) p.195。また、身体障害をもつひとが、どのようにして性の領域で周縁化されているのかについては、倉本 (2005) や飯野 (2020) などが参考になる。

⁵⁴ 飯野 (2020) pp.57-60。

⁵⁵ Butler (1990=2018) p.63。

⁵⁶ Butler (1990=2018) p.40。

⁵⁷ Butler (1990=2018) p.63。

⁵⁸ Butler (1990=2018) p.63。

⁵⁹ Gupta (2015) P.147。

⁶⁰ Chen (2020=2023) p.58。

⁶¹ Chen (2020=2023) p.59。

⁶² Chen (2020=2023) p.60。

⁶³ Chen (2020=2023) p.60。

⁶⁴ Chen (2020=2023) p.60。

⁶⁵ Butler (1990=2018) p.66。

⁶⁶ Butler (1990=2018) p.66。

⁶⁷ Butler (1990=2018) p.66。

⁶⁸ Foucault (1976=1986) p.107。

⁶⁹ Butler (1990=2018) p.220。

(せきい・ちあき)